

## 女性医師の窓

## 知っていますか？ 女性外来は性差医療なのです。 より良い人生のために ある女医のつぶやき NO1

金沢医科大学21世紀集学的医療センター助教 女性外来  
赤澤 純代



女性外来とは、女医さんが女性を見る外来と思われがちですが、実は違います。これから、地道に4年間女性外来の患者さんと向き合い、逆にいろんなことを教えていただいた女医のつぶやきを是非、読んでください。

今後の予定としてこれまでの西洋医学以外の漢方薬・アロマセラピー・運動：体操なども順番に女性の健康と知恵という内容も含めて書いていきたいと思います。

日本では、従来の「母子保健」の考え方が、「生涯を通じた女性の健康作り」という概念に拡大されました。2005年に男女共同参画会議が制定した「男女共同参画社会の形成の促進に対する基本方針」の中にも「性差に応じた的確な医療である性差医療を推進する」という言葉があり、さらに2007年に新健康フロンティアに「女性の健康力」が追加されました。また、来年度より厚労省の医療政策のなかで子供課が性差医療の分野を受け持っていたそうですが、生活習慣病の管理する課に変更になったようです。なぜこのような話をするか？というと、メタボリックシンドローム 動脈硬化性疾患 虚血性心疾患（心筋梗塞）が、米国の女性の死因 No.1だからです。2004年よりAHA（アメリカ心臓病学会）は「赤」を女性と心疾患のシンボルとして、国を挙げて“Go Red for Women”のスローガンのもと、精力的なキャンペーンを行っています。

日本でも、食生活の欧米化に伴って欧米と同様の死因に推移することが予想されるため、早からの予防が大切になってきます。つまり、性差により疾病の予防法も変わってきますので、このような視点を考慮した医療と医療政策が大切になるわけです。

女性外来のバックボーンは、男女の体を支配するホルモン分泌・機能などの違いを明らかにし、より明確にして、女性・男性の疾病の発現構造の違いより診断・治療をさらに進める性差医療なのです。

性差医療を実践する場が女性外来です。

では、性差医療（Gender-specific Medicine：GSM）とは何でしょうか。

男女比が圧倒的に一方の性に傾いている病態（痛風は男性に多く、膠原病は女性に多い）、発症率はほぼ同じでも、男女間で臨床的に差を見るもの（心筋梗塞が良い例ですが、男性は若い頃より心筋梗塞で命を落としますが、女性は閉経前に心筋梗塞になることは稀で、閉経後10年

経ってから増え始め、75歳を過ぎると急速に死亡率が増え男女差がなくなるという経過を取ります) いまだ生理的、生物学的解明が男性または女性での分析解明が遅れている病態、社会的な男女の地位と健康の関連などに関する研究を進め、その結果を疾病の診断、治療法、予防措置へ反映することを目的とした医療改革を GSM といいます。

これまでの医療は、治験なども女性は妊娠出産があるためデータも取りにくいという理由から、男性のデータをもとに治療方針が決められていました。しかし、そのデータは女性にはなかなか当てはまらず治療効果が上がらないことから、1990年代にアメリカで GSM の声が上がりました。日本へは約10年ほど遅れて、天野 恵子先生が概念を伝えてくださいました。そして、千葉県、鹿児島県を口切に、全国へ GSM の実践の場として女性外来が広がってきました。

少子高齢化の中、女性外来での健康の提案は重要なものと考えられます。例を上げますと心筋梗塞の危険因子では男性と女性では異なります。意外かもしれませんが、女性の危険因子は、1位：喫煙、2位：糖尿病、3位：高血圧です。男性は1位：高血圧、2位：喫煙、3位：糖尿病、と女性とは異なります。女性外来では喫煙に関しての問題提起もなされなければいけません。生活習慣(ライフスタイル)を変えることは女性の健康に、さらに次世代の遺伝子(遺伝子環境相互作用)にまで影響を及ぼすと考えられます。

家庭においても健康管理センター的役割をはたす女性は家族の健康のキーパーソンです。家族への教育・啓蒙、遺伝的正しい継代も含めて、それらから女性であることを再認識することが重要です。お互いの男女の違いを認め合い、理解し、お互いを大切に思うこと、若いときより男女の身体の正しい医学情報を提供し、与えられた体を大切にしながら、美しく老いることを提案していくことが金沢医科大学における私たちの仕事でもあります。

かってからいわれていることでもあります。私の考えでは、女性はやはり太陽です。元気であると、基本である家庭がまず明るくなり、社会も活性化し、男性もそれに伴って元気になると思います。一つ例をとりますと不妊治療に莫大なお金と費用を費やす少子化対策も良いかと思いますが、国民全体の心と身体の健康を考えると、予防と教育にもう少し重点をおいていく政策がすすみ、性差医療・女性外来という分野にもそれなりの医療点数がつくことを望みます。なんといっても知識と生活習慣しだいで健康を選べる時代です。予防的教育に重点をおく医療は採算が合わず、閉鎖する外来もあると聞きます。しかし、県民・国民のことを考えると、大切な健全な社会への先行投資ではないかと考えます。益々、皆様のご理解を得て、人口の半分以上は必ず女性で成り立ち、少子化が云々され、男女共同参画社会が賞揚される現在、性差医療、女性外来にもっと焦点が合わされ、小児医療、産科医療と共にさらに必要性が認知が広まることを祈っております。2003年度より、細々と女性外来をしていた女医の呟きです。今回は、自分の経験と具体的ないろいろなお伝えします。